

エゼキエル書 37 章 1-14 節 「イスラエルの復活」

1A エルサレムの破滅と回復

2A 国の復興

1B 干からびた骨 1-10

1C 幻 1-6

2C 預言 7-10

2B 霊的覚醒 11-14

3A キリストにあるよみがえり

本文

今年二月に、ロゴス・ミニストリーでイスラエル旅行に行きました。見城和人さんをはじめ、ここに参加しておられる方々で何人かいっしょに体験しましたが、今日は、現代のイスラエル国が聖書預言の中にあることをお話ししたいと思います。

日本の方々とイエス・キリストについて、そして聖書について話しますと、次のような疑問を伺います。「イエス・キリストが実在していたことが、どのように分かるのですか？聖書が神話ではないことは、どうして分かるのですか？」この質問に対して、私はしばしばこのように逆質問します。「では、豊臣秀吉が実在していたことはどのようにして分かるのですか？」もちろん、豊臣秀吉に会ったことはありません。人々が話しているから？教科書に乗っているから？それとも、NHK 大河ドラマでしばしば登場するからでしょうか？よく考えれば、当時の文献が大量に残されていて、そして大阪城跡など、遺跡もたくさん残っています。

今、イスラエルに行けば、私は数えたことがないけれども、豊臣秀吉についての文献や遺跡と同じぐらいの、いやそれよりも多いかもしれませんが、膨大な数の遺跡が残っています。掘れども掘れども、聖書に登場する人物や場所、その当時の様子が再現できる考古学の発見があります。そして考古学者は、発掘をするときに、二つの本をそれぞれの手に持つと言われていますが、一つはヨセフスと呼ばれる歴史家の本、そしてもう一つが聖書です。聖書は、古代の日本神話のような本ではありません。聖書は当時を知る最も信憑性のある歴史書であり、歴史的事実を記している書物です。

そしてその聖書の中に、「福音」と呼ばれるものがあります。イエスがさまざまな奇跡によって、天地を造られた神から来た方であり、人類の罪のために十字架につけられ、三日目によみがえった、というものであります。よみがえった、復活したなど、到底受け入れがたいと思うのですが、この知らせを聞いて信じたという、世界中の数多くの人が歴史を通じていた、そして今もいる、ということもこれまた事実なのです。そして西洋の宗教だと言われるのですが、今はむしろアジア全体に、

聖書が言われているように、イエスがよみがえられ、そして今も生きておられ、私はこの方に従っていくと公言している人々が多数いるのです。韓国では三分の一がクリスチャンとも言われ、中国では 10 パーセント近くが信者ではないかと言われています。フィリピン、ベトナム、インドネシア、その他の国にもたくさんいます。

もう一つ、日本の人々、特に女性の間で不思議に思う現象は、占いが生活の一部になっているということです。自分の将来について不安になるのでしょう、星占いなどに頼るその姿を見る時に、私はいつも思うのです。「もっと正確に、あなたの将来の計画を知っている方がおられるのに。」預言者でエレミヤという人がこう言いました。「わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。…主の御告げ。…それはわざわざではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。(エレミヤ 29:11)」将来と希望の計画が神によって与えられているのに、占いによって自分を縛っているからです。

聖書という書物は、ひとりの神を紹介しています。その方は天と地を造られた創造主です。そしてすべてを創造したのですから、時間を超えた永遠の中に住まわれる方です。何百年も先のことを、既に起こったかのように語られる神がいることを、聖書は証言しています。実際のことが起こる前に、預言者は数百年前からそれが起こるといつて前もって告げていました。イザヤという預言者によって、神がこう言われています。「遠い大昔の事を思い出せ。わたしが神である。ほかにはいない。わたしのような神はいない。わたしは、終わりの事を初めから告げ、まだなされていない事を昔から告げ、『わたしのはかりごとは成就し、わたしの望む事をすべて成し遂げる。』と言う。(46:9-10)」神と呼ばれているものは数多くあるが、終わりのことを初めから告げるような神は、わたししかいない、天地万物を造ったわたしが、あなたがたにとっての神なのだ。」とされています。

1A エルサレムの破滅と回復

そして今から読ませていただく、エゼキエル書という預言書の中にそのことを確認できる箇所がありますので、そこを読みたいと思います。エゼキエルは、紀元前 597 年に第二次バビロン捕囚があった時に、他のユダヤ人と一緒に捕え移された祭司でした。そのバビロンの捕囚の地で、神からの幻を受けました。ですから、今から約2600年前に書いたものです。けれども、それが今、イスラエルの国があるということによって目の前で確認できます。エゼキエル書 37 章 1-14 節をお読みしたいと思います。

37:1 主の御手が私の上であり、主の霊によって、私は連れ出され、谷間の真中に置かれた。そこには骨が満ちていた。37:2 主は私にその上をあらゆる方向に巡らせさせた。なんと、その谷間には非常に多くの骨があり、ひどく干からびていた。37:3 主は私に仰せられた。「人の子よ。これらの骨は生き返ることができようか。」私は答えた。「神、主よ。あなたがご存じです。」37:4 主は私に仰せられた。「これらの骨に預言して言え。干からびた骨よ。主のことばを聞け。37:5 神である主はこれらの骨にこう仰せられる。見よ。わたしがおまえたちの中に息を吹き入れるので、おまえ

たちは生き返る。37:6 わたしがおまえたちに筋をつけ、肉を生じさせ、皮膚でおおい、おまえたちの中に息を与え、おまえたちが生き返るとき、おまえたちはわたしが主であることを知ろう。」37:7 私は、命じられたように預言した。私が預言していると、音がした。なんと、大きなとどろき。すると、骨と骨とが互いにつながった。37:8 私が見ていると、なんと、その上に筋がつき、肉が生じ、皮膚がその上をすっかりおおった。しかし、その中に息はなかった。37:9 そのとき、主は仰せられた。「息に預言せよ。人の子よ。預言してその息に言え。神である主はこう仰せられる。息よ。四方から吹いて来い。この殺された者たちに吹きつけて、彼らを生き返らせよ。」37:10 私が命じられたとおりに預言すると、息が彼らの中にはいった。そして彼らは生き返り、自分の足で立ち上がった。非常に多くの集団であった。37:11 主は私に仰せられた。「人の子よ。これらの骨はイスラエルの全家である。ああ、彼らは、『私たちの骨は干からび、望みは消えうせ、私たちは断ち切られる。』と言っている。37:12 それゆえ、預言して彼らに言え。神である主はこう仰せられる。わたしの民よ。見よ。わたしはあなたがたの墓を開き、あなたがたをその墓から引き上げて、イスラエルの地に連れて行く。37:13 わたしの民よ。わたしがあなたがたの墓を開き、あなたがたを墓から引き上げるとき、あなたがたは、わたしが主であることを知ろう。37:14 わたしがまた、わたしの霊をあなたがたのうちに入れると、あなたがたは生き返る。わたしは、あなたがたをあなたがたの地に住みつかせる。このとき、あなたがたは、主であるわたしがこれを語り、これを成し遂げたことを知ろう。…主の御告げ。…」

干からびた骨が谷の間に置かれていましたが、その骨に肉がつき、筋がついて肉体を持ち、それから息が吹き込まれた、生きた人々になったという幻です。そしてこれを主なる神が、「これらの骨はイスラエルの全家である。」と宣言しています。イスラエルの人々が国を失って、世界に散り散りになって、自分たちの民族は干からびた骨のようだ、もう死んでしまい、死んでしまっただけでなく、干からびてしまった、と言っている人々に対して、「あなたがたは生きるのだ。国として復興するのだ。」と言っているのがこの幻です。

ところでエゼキエル書は、48 章もある長い書物です。神は、繰り返し、「このことによって、わたしが神であり、主であることをあなたがたは知ろう」という言葉を使われています。私たちが、天地を造られたまことの神をないがしろにして生きている時、ご自分が神であることを神が訴えられています。ある出来事を前もって告げ、それを行なわれることによって、「わたししか神がいないのだ、わたしが主である。」と告げておられる書物です。主題を一言でいうならば、「神の栄光」です。

そして、エゼキエル書ははっきりと二つに分けることができます。1 章から 32 章までと、33 章から 48 章までです。それは、33 章にイスラエルの首都エルサレムが完全に破壊された、ユダヤ人がバビロンによって完全に滅んでしまったという知らせが、エゼキエルの耳に入ることを起点としています。紀元前 586 年に、第三次バビロン捕囚があり、それでエルサレムの神殿が破壊されて、ユダヤ人が完全にバビロンに捕え移されました。1 章から 32 章までの間に、神は基本的にこういわれていました。「あなたがたがバビロンの力から解放されるとでも思っているのか。お前たちが

わたしに背いているから、そんなことはない。必ず、お前たちはバビロンによって滅びる。」神に対して背を向けているのであるから、どんなにあがいてもバビロンによって神が裁く、ということです。興味深いことに、エゼキエルは途中から話せなくなってしまいました。口の利かない人になりました。それは神が聞いている人に対してもう語るべき言葉がなくなってしまったからです。

けれども 33 章で、神がエゼキエルの口をまた開かれます。「私たちが捕囚となって十二年目の第十の月の五日、エルサレムからのがれた者が、私のもとに来て、「町は占領された。」と言った。そののがれた者が来る前の夕方、主の御手が私の上であり、朝になって彼が私のもとに来る前に、私の口は開かれた。こうして、私の口は開かれ、もう私は黙っていなかった。(33:21-22)」これからエゼキエルが語るのは、これまでと正反対です。神は、33 章から 48 章までに、基本的にこう語っておられます。「お前たちは悪者だ。しかしわたしは、どんなことがあってもお前たちを回復させる。」今度は裁きではなく回復です。神の怒りではなく、神の憐れみと恵みです。神はどんなことがあっても、彼らが裁きから逃れられないようにされたのと同じように、今度は、彼らにどんなことが起こっていても、彼らが回復から逃れることはない、必ずイスラエルの家を建て直す、と宣言しておられます。

神は、イスラエル人だけでなく、すべての人に対して同じことを宣言しておられます。私たちは、どんなことをしても、罪から来る裁きから逃れることはできません。聖書には、すべての人が罪を犯して、罪によって死に、死後には裁きがあることが書かれています。天地を造られた、聖なる神、きよい神に対してすべての人が罪を犯しました。私たちがどんなにもがいても、神は必ず私たちを裁かれます。これが真理の一つです。けれども、神はそれだけで終わらせません。神は、どんなに私たちが罪の中で死に、神に裁かれるような存在であっても、キリストにあって絶対に生かして下さる、という強い意志を持っておられます。私たちの罪を完全に赦してくださいます。あのキリストの十字架は、神が私たちの一つや二つの罪を赦すためのものではありません。何千、何万と犯した、心や思いの中のすべての罪を赦され、そして罪の中で死んでしまった私たちを生かします。キリストが死んだのに神がよみがらせてくださったように、私たちもキリストにあって生かして下さいます。どんなことがあっても、イエス様に信頼を置く人であれば罪から、死から、地獄から救って下さるのです。

それでエゼキエル書を辿っていきますと、34 章には、羊たちを良く世話する羊飼いのような指導者が、イスラエルに与えられるという話があります。その指導者とは、ダビデ王の世継ぎの子キリストであります。そして 35 章と 36 章には、イスラエルの土地がぼろぼろになって廃墟となっているところを、神が土地から作物が出てくるようにし、町々が建てられるようにすると強く宣言しておられます。36 章 9-10 節に、こうあります。「わたしはおまえたちのところに行き、おまえたちのところに向かう。おまえたちは耕され、種が蒔かれる。わたしは、おまえたちの上に人をふやし、イスラエルの全家に人をふやす。町々には人が住みつき、廃墟は建て直される。」

今、飛行機でイスラエルに行きますと、そこは中東という大海原に孤島のようにして浮かぶ先進国の姿を表しています。そこは、今や農業技術、医療技術、そして IT 関連の先端技術で世界をリードしている国となり、テルアビブには高層ビルが立ち並んでいます。けれども、十八世紀にそこを訪問した人々は、そこが何もない荒地と湿原しかないところだと言っていました。十八世紀後半に、東ヨーロッパを始めとしてユダヤ人が帰還し始めて、ホロコーストが起こってからはその帰還が加速化して、そして戦後すぐに国連によって、ユダヤ人の国が認められました。1948 年にイスラエルが建国しています。続けて彼らは、農地を開墾して、砂漠をも先進の農業技術によって開拓し、それで今のイスラエルの姿になっています。

ユダヤ人は、紀元前 586 年に神殿が破壊されて祖国を失っただけでなく、紀元 70 年にローマによって神殿が破壊され、再び離散の民となりました。今度は世界中に彼らは散っていきました。そして散っていったところで差別と迫害を受け、虐殺事件も数多く起こり、最たるものがホロコーストでした。六百万人が殺されたと言われていました。しかし、これらのことが起こったのにも関わらず、生き延びることができただけでなく、民族としてのアイデンティティーを失わず、自分たちの住んでいた土地に戻って、この土地を回復させたのです。

これらのことが、ユダヤ人の人たちが優れているからできたのでしょうか？彼らが良いことを行なったから、そうなったのでしょうか。いいえ、神はこう言われます。「それゆえ、イスラエルの家と言え。神である主はこう仰せられる。イスラエルの家よ。わたしが事を行なうのは、あなたがたのためではなく、あなたがたが行った諸国の民の間であなたがたが汚した、わたしの聖なる名のためである。わたしは、諸国の民の間で汚され、あなたがたが彼らの間で汚したわたしの偉大な名の聖なることを示す。わたしが彼らの目の前であなたがたのうちにわたしの聖なることを示すとき、諸国の民は、わたしが主であることを知ろう。…神である主の御告げ。…わたしはあなたがたを諸国の民の間から連れ出し、すべての国々から集め、あなたがたの地に連れて行く。(36:22-24)」彼らが優れているから、このようにしてイスラエルの地に戻れたわけではありません。神がおられて、この神が生きていることを示すために、このような奇跡を行なわれた、ということです。

そして続けて読みましょう。「わたしがきよい水をあなたがたの上に振りかけるそのとき、あなたがたはすべての汚れからきよめられる。わたしはすべての偶像の汚れからあなたがたをきよめ、あなたがたに新しい心を与え、あなたがたのうちに新しい霊を授ける。わたしはあなたがたのからだから石の心を取り除き、あなたがたに肉の心を与える。(36:25-26)」神は、彼らをイスラエルの地に戻された後に、ご自分の霊によって彼らの罪をきよめ、そして心を変えてくださると言います。石のように固くなっている心を、肉の心に変えてくださるのです。

イエス様が、ニコデモというユダヤ教の偉い人に、「あなたがたは、水と霊によって新しく生まれなければ、神の国に入れぬ」と言われましたが、私たちの心はちょっとしたことで変えられるものではありません。実は、罪によって心が石のように固くなってしまっていて、神の霊によらなければ

その心はきれいにならないし、肉のように柔らかくならないのです。けれども、神にはそれができます。イエス様に信頼を寄せる人は、神がご自分の霊を与えてくださり、心を変えてくださるのです。

2A 国の復興

こうして 36 章は、荒れ果てた土地に作物が育てられ、町々ができるという預言でした。けれども、単に町々が建てられることと、国が建てられることは大きく違います。ユダヤ人たちがまだ生きていて、郷土に戻り開墾をして、町々を建てること自体、奇跡でした。けれども、だれが国を建てると考えられるでしょうか？それは聖書の中の夢想でしかない、とユダヤ人でさえもが思っていました。ところが十九世紀の終わりに、その夢想を考えていた人物がいました。テオドール・ヘルツルという人です。彼は、1897 年 9 月 3 日の日記の中で、既にユダヤ人国家の大本を築いたと書きました。けれどもこうも記しています。「こんなことを今、声高に言おうものなら、世間の物笑いになるだけだ。だがおそらく 5 年たてば、いや 50 年たてば必ずだれもが分かってくれるはずだ。」1897 年の 50 年後、つまり 1947 年、その 11 月に国連がパレスチナをユダヤ人とアラブ人に分ける分割決議案を採択し、国際的にユダヤ人国家が認知されたのです。そして 1948 年 5 月 14 日に独立宣言をしました。その日記の言葉はまさに預言的なものだったのです。

当時の状況をよく表すものとして、1911 年に初版で発行されたブリタニカ百科事典があります。ヘブル語についてこう書いてあるそうです。「古代ヘブライ語の正しい発音を取り戻す可能性は、中東にユダヤ人の国が再び建てられる可能性と同じように、程遠いものである。(Possibility we can again recover correct pronunciation of ancient Hebrew is as remote as the possibility that Jewish empire will be ever again be established in the Middle East.)」1911 年ですから、もうすでにユダヤ人がパレスチナ郷土に帰還して、ベン・ヤフーダを中心としてヘブル語も日常会話に復活させるべく運動を起こしていた時です。それでも、百科事典でさえもがまるで信じられないという説明を行なっているのです。

既にイスラエル国が存在する今、この国が再び出現することを全く信じられない人々を私たちは簡単に笑うことができます。けれども状況は、人間的には絶対に不可能なものでした。キリスト教会でさえそうでした。歴史的にイスラエルの地位を認めない神学を持っていました。「神が教会を建ててくださった今、イスラエルの役割はなくなったのだ。」という立場です。けれども、今から読む 37 章、あの有名な干からびた骨が肉を付けて、人間になり、霊まで与えられるという幻を、そのまま受け入れるには、あまりにも非現実的で夢物語のような話だったのです。だから、今現在、教会が建てられているのだから、実はイスラエルに対する神の約束は教会によって実現しているのだと解釈して、自分たちの信じていることと整合性を保とうとしたのです。

しかし、主はあえてその不可能なことを可能にされました。このことを行なわれることによって、「あなたがたは、わたしが主(であることを知ろう。(13 節)」と再び言われたのです。全世界に、そ

してイスラエル人自身に、ご自分だけが神であり、主であることを、イスラエルの国を再建されることによって示す、というのがここ 37 章の内容です。

1B 干からびた骨 1-10

もう一度、本文を読んでいきましょう。

1C 幻 1-6

37:1 主の御手が私の上であり、主の霊によって、私は連れ出され、谷間の真中に置かれた。そこには骨が満ちていた。37:2 主は私にその上をあちらこちらと行き巡らせた。なんと、その谷間には非常に多くの骨があり、ひどく干からびていた。37:3 主は私に仰せられた。「人の子よ。これらの骨は生き返ることができようか。」私は答えた。「神、主よ。あなたをご存じます。」

エゼキエル書は、他の預言者に比べて、目に見える形の預言が非常に多いです。彼が預言者として召される時、生々しい天使ケルビムの姿を見たし、また彼自身がいろいろな実演をして、これから起こることを預言したりしました。今でいうなら大学の講義ではなく、小中学校の視聴覚室での授業と言ったところでしょう。ここでも、ハリウッドのホラー映画にも出てきそうな、干からびた骨がくっつきあって、筋ができて、肉を持ち、そして生き返るといふ生々しい預言を受けています。

1 節に、「主の御霊によって、私は連れ出され」とあります。彼は、何度となく、神の御霊によって、半ば強引に引っ張り出される経験をしています。例えば、捕囚の地であるバビロンのケバルにいたのに、髪をふさをつかまれて、エルサレムの神殿の中にまで連れて行かれました。黙示録の使徒ヨハネもそうですね、御霊によって天にまで引き上げられました。使徒行伝のピリポも、サマリヤからガザに行く道へ御霊によって瞬間移動しましたし、時に主はこのような強い促しを与えられます。イエス様が空中にまで戻ってこられて、教会が引き上げられる携挙も、その「引き上げる」のギリシヤ語では「強引につかんで連れて行く」という意味があります。

そして連れ出されたのが、谷間の真ん中です。ゼカリヤ書 1 章にも、幻を見せられたゼカリヤは、谷底にあるミルトスの木の間に、赤い馬に乗っておられる主を見ました(8 節)。これは、エルサレムが諸外国によって倒れて、圧迫を受けている姿を表していました(12,15 節)。ですから、谷間はバビロン、そしてその後の諸国の狭間にいて倒れているイスラエルの姿を表していたのです。

「多くの骨」があり、そして「ひどく干からびていた」とエゼキエルは強調しています。大勢のイスラエル人の姿がこうなっている、という意味です。数多くのユダヤ人が生きる希望を失ってしまって、絶望している状態です。先ほどお話した、また復興することなど不可能に見える、完全に死んでしまった状態です。

その状態を見せて、主はあえてエゼキエルに、「人の子よ。これらの骨は生き返ることができようか。」と尋ねられています。不可能な状況をエゼキエルに意識させたいがゆえの、ご質問です。もちろん無理です。ラザロが死んで四日経っただけで、「主よ。もう臭くなっておりましよう。(ヨハネ 11:39)」とマルタは言いました。腐乱が始まっているどころか、ここでは骨だけになって、しかも干からびています。

37:4 主は私に仰せられた。「これらの骨に預言して言え。干からびた骨よ。主のことばを聞け。
37:5 神である主はこれらの骨にこう仰せられる。見よ。わたしがおまえたちの中に息を吹き入れるので、おまえたちは生き返る。37:6 わたしがおまえたちに筋をつけ、肉を生じさせ、皮膚でおおい、おまえたちの中に息を与え、おまえたちが生き返るとき、おまえたちはわたしが主であることを知ろう。」

主に命じられたとおり、骨に対して預言をしました。これがどれだけ滑稽なことが考えてください。干からびた骨に預言するのです。生きていないのです、物体に預言しているのと同じです。けれども、主はそれを行ないなさいと命じています。そうすれば、骨に筋がつき、肉を生じ、皮膚で覆われます。それから息を神が吹き込まれます。そうすると、彼らが生き返るといのです。

2C 預言 7-10

37:7 私は、命じられたように預言した。私が預言していると、音がした。なんと、大きなどろき。すると、骨と骨とが互いにつながった。37:8 私が見ていると、なんと、その上に筋がつき、肉が生じ、皮膚がその上をすっかりおおった。しかし、その中に息はなかった。37:9 そのとき、主は仰せられた。「息に預言せよ。人の子よ。預言してその息に言え。神である主はこう仰せられる。息よ。四方から吹いて来い。この殺された者たちに吹きつけて、彼らを生き返らせよ。」37:10 私が命じられたとおりに預言すると、息が彼らの中にはいった。そして彼らは生き返り、自分の足で立ち上がった。非常に多くの集団であった。

エゼキエルは言われたとおりに行いました。骨に対して預言すると、その骨が肉を持ち、皮膚が生じました。興味深いことに息がありません。そして今度は、「息」に対して預言をなさい、と言われました。すると、四方から風が吹いてきて、それがその人々の体の命となりました。ヘブル語では「息」「風」そして「霊」は、みな同じ言葉が使われています。רוּחַ(ルハ)です。主は、無いものを有るものとして語られることによって創造の働きをし、そしてその創造を神の御霊によって行なわれるのです。イエス様は、「わたしがあなたがたに話したことばは、霊であり、いのちなのです。(ヨハネ 6:63)」と言われました。

神の言葉は書物に書かれている文字ではありません。字面ではありません。生きている命です。そして神の霊は、そこら辺にふわふわしている雰囲気ではありません、このように干からびた骨に肉体を持たせ、そして命まで与えることのできる力を持っておられます。

そしてここで、主は段階的に預言を与えられたことに注目してください。初め、骨に対しての預言を与えられました。それから息に対する預言を与えられました。明確に、肉体だけのイスラエル人と神の御霊をもったイスラエル人とを区別しておられます。

この箇所を読んで、おそらく何人かの方は、創世記2章のアダムの創造を思い出されたのではないかと思います。主なる神は、まず土の塵で人を形造られました。肉体だけの人です。けれども、ご自分の息を鼻から吹き込まれました。それで、初めて生きた人となったのです。霊を持つ人となりました。それと同じように、イスラエル国の復興もはっきりとした区別があります。まず、物理的に国が復興すること。それから霊的に復興すること。この二段階で実現するのです。

そして興味深いことに、最後に人々が「非常に多くの集団」となっていることです。先の学び36章で、人々が例祭の時の羊の群れのように増えるという預言がありましたが、これは単に人数が多いことだけを意味していません。原語に則するならば「力ある集団」と訳したほうが良いでしょう。英語では”army”つまり「軍隊」と訳されています。

イスラエル人はただ多くなるだけでなく、強くなります。出エジプト記1章で、エジプトにいたイスラエル人は、「おびたしくふえ、すこぶる強くなり(1:7)」とあります。だからパロが脅威を覚えたのです。イエス様が戻ってこられる直前、大患難の中においてもユダヤ人が力ある軍隊となって戦うことがゼカリヤ書10章で預言されています。「万軍の主はご自分の群れであるユダの家を訪れ、彼らを戦場のすばらしい馬のようにされる。この群れからかしら石が、この群れから鉄のくいが、この群れからいくさ弓が、この群れからすべての指揮者が、ともどもに出て来る。道ばたの泥を踏みつける勇士のようになって、彼らは戦場で戦う。主が彼らとともにおられるからだ。馬に乗る者どもは恥を見る。(ゼカリヤ10:3-5)」

イスラエル・アラブ紛争史の概略を勉強したいと思いますが、独立戦争においてはイスラエル国防軍とアラブ連合軍が1対10ぐらいの比率で、六日戦争でも同じような圧倒的な差異があったにも関わらず、イスラエルの大勝利で終わりました。このように強い集団、軍団となると主は約束してくださいました。

2B 霊的覚醒 11-14

37:11 主は私に仰せられた。「人の子よ。これらの骨はイスラエルの全家である。ああ、彼らは、『私たちの骨は干からび、望みは消えうせ、私たちは断ち切られる。』と言っている。

ここにはっきりと、この幻の意味があります。「これらの骨はイスラエルの全家」であるとあります。イスラエルの人々が自分たちに国としての望みが消えうせたことを、骨が干からびたと形容しているのです。絶望状態に陥っている彼らの言葉を聞いて、主は、干からびた骨でも、多くの強い集団になるという、とてつもない大きな希望を与えられたのです。もしかしたら、この中で、自分の骨は干からび、望みは消えうせたという強い絶望感を抱いた方、また今も抱いている方がおられるかもしれません。イスラエルの神である主は、同じことを、ご自分を信じる者にしてください。

37:12 それゆえ、預言して彼らに言え。神である主はこう仰せられる。わたしの民よ。見よ。わたしはあなたがたの墓を開き、あなたがたをその墓から引き上げて、イスラエルの地に連れて行く。
37:13 わたしの民よ。わたしがあなたがたの墓を開き、あなたがたを墓から引き上げるとき、あなたがたは、わたしが主であることを知ろう。

ユダヤ人が祖国を失ったのは、バビロン捕囚の次に、紀元前 70 年のローマによるエルサレム破壊以降でした。それから最近に至るまで世界離散の民となったわけですが、後に皇帝になったローマ総督ティトゥスが、エルサレムを包囲し、神殿を破壊した後も、他のところに籠城してローマと戦ったユダヤ人たちがいました。そうです、あの有名なマサダです。死海の西側のほとりにある、菱形にそびえる高地にあります。

そこはもともと、ヘロデ大王が何か自分に対する反乱が起こった時に備えて造らせた要塞でしたが、彼はそれを使うことなく死にました。ユダヤ人の熱心党の者たちがここを占拠し、ローマの包囲に対して3年間、抵抗したのです。

そしてその上にはシナゴーク、つまりユダヤ教の会堂がありました。マサダの遺跡発掘は、イスラエルが 1948 年から 49 年まで続いた独立戦争によって自分の領土となったその地域を、イガエル・ヤディンという考古学者を中心としたチームが本格的な発掘をしました。そこでそのシナゴークを発見し、その中で巻き物を発見したのです。申命記 33 章から 34 章、そしてエゼキエル書 35 章から 38 章までの断片でした。そうです、ここ 37 章も入っていたのです！

マサダに籠城していたユダヤ人は、「あなたがたを墓から引き上げて、イスラエルの地に連れて行く」という神の言葉をそのまま信じて、そしてそこで死に絶えました。誰がそんなこと信じられたでしょうか？世界のほとんどの人がそのようには信じなかったのです。けれども、それを発掘したイガエル・ヤディンの一団は、それを見て身震いしたことでしょう。まさに独立戦争で勝ち、イスラエルが国として建てられたことによって、ここを発掘できる自分たちは、彼らが望みを抱いて死んでいったこの預言の成就であることを気づいたのです。

37:14 わたしがまた、わたしの霊をあなたがたのうちにいれ、あなたがたは生き返る。わたし

は、あなたがたをあなたがたの地に住みつかせる。このとき、あなたがたは、主であるわたしがこれを語り、これを成し遂げたことを知ろう。…主の御告げ。…」

今のイスラエルがエゼキエル、また他の預言者たちの預言の全てではありません。一部分なのです。干からびた骨から筋が与えられ、肉体まではあるけれども、御霊が与えられていない人々です。エゼキエル 36 章 26 節にある「**新しい霊を授ける**」という主の預言、そしてゼカリヤ 12 章 10 節にある、「**恵みと哀願の霊を注ぐ**」という預言、そしてイエス様がニコデモに話された「新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」という言葉が、彼らに実現しなければ完成したことにはならないのです。

3A キリストにあるよみがえり

ここまで読みましたが、いかがでしょうか。イスラエルの国そのものが、聖書の神が今も生きておられ、その言葉が真実であることがお分かりになったと思います。エゼキエル書は将来のことも書いています。ユダヤ人のダビデという王の子孫に、この世界を救う王が来られて、そしてイスラエルの国の王となることを預言しています。事実、ダビデの子として二千年前に、イエスが生まれました。そしてこの方が、死んでいたのに三日目によみがえられたのです。この方は天に昇られて、そしてまた戻ってくると約束されています。その時に、イスラエル人に神の霊が注がれて、新しく生まれます。

これはイスラエルだけの出来事ではありません。イスラエルの土地と国に対して、神が命を与えられるのと同じように、イスラエル人ではない世界中の人々に、イエス・キリストによって新しい命を与えると約束してくださいました。実は、私たちの命はイスラエルの国と同じような状態であると聖書は教えています。エペソ書 2 章 1 節から読みます。

2:1 あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、2:2 そのころは、それらの罪の中にあってこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従って、歩んでいました。2:3 私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあって、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行ない、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。

私たちは罪の中で死んでいる、とあります。肉体は生きていますが、人間の可能性、その靈魂において死んでいる、とあります。私たちはもがきます。何とかしてそうではない、自分は何とかなる人間なのだ、と思わせています。けれども、心が虚しいのです。実際はそうならないからです。自分に命とすべてを与えられた天地を創造した神から目を背けているからです。それを聖書では罪と呼んでいます。罪の中で私たちは死んでいるのです。けれども、神はイスラエルに行われたのと同じ働きを行なってくださいます。

2:4 しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、2:5 罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、..あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。..2:6 キリスト・イエスにおいて、ともによみがえらせ、ともに天の所にすわらせてくださいました。

自分が罪を犯した、ということを確認することはとても難しいです。これまで頑張ってきた人生はどうするのか？と思います。けれども事実はそうなのです。けれども、希望があるのです。自分では全くできなくなっていること、干からびた骨のようになっている状態で、神はキリストにあって私たちを生かしてくださいます。一方的な恵みによって生かしてくださるのです。「キリストとともに」とあります。キリストはあなたの罪のために死なれました。そして葬られました。それからよみがえられました。自分の罪のためにキリストが死なれたことを認め、この方がよみがえられたことに自分の信頼を寄せるのであれば、キリストがよみがえられたように、自分の霊も死んでいたのに生きるようになるのです。肉体が誕生しただけでなく、霊も誕生することになります。そしてイスラエルの国と同じように、単に肉体だけでなく、霊的にも一人の人として立つことができるようになります。